

福岡県医薬品適正使用促進連絡協議会

福岡県における取組について

資料1

【現状・課題】

- 高齢者の服用薬剤の種類は多く、75歳以上でより多い傾向がある。
- 服用薬剤の種類が多くなることにより、薬剤関連の有害事象の発生頻度が高くなる。特に、転倒の頻度は約2倍となり、転倒による骨折が原因で要介護状態になるおそれがある。
- 多剤服用する高齢者は、複数の医療機関を受診し、複数の調剤薬局で薬を受領する傾向にある。服用薬剤数の適正化には、お薬手帳を一冊に集約し、持参を促すことにより服薬情報を一元管理することが重要である。
- 多剤服用を解消するには、薬剤師が一元化された服薬情報に基づき質の高い疑義照会を行うとともに、薬剤師だけではなく処方を行う医師を含め、多剤服用の問題点、解消等についての共通認識をもつ必要がある。

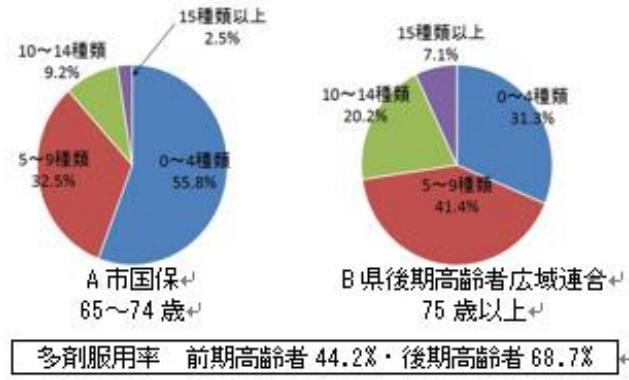
【目的・目標】

高齢者の服用薬剤数の適正化を図り、安全な薬物療法を提供する。

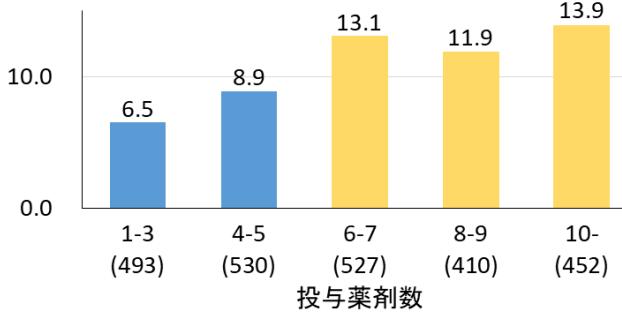
福岡県医薬品適正使用促進連絡協議会

- 本県内における医薬品の適正使用を促進し、高齢者等の薬物療法に関する安全対策を図るため、医師、薬剤師、その他患者に携わる関係者による協議会を設置(H30年度～)し、医薬品適正使用の方策、医療機関や薬局等の取組や連携、患者への啓発等について、協議、調整を実施。
- 協議会を構成する関係団体等と連携し、高齢者の服用薬剤数を減らす取組等を実施。

高齢者の多剤服用の状況（平成27年中医協資料）



薬物有害事象発生率(%)



処方適正化アプローチ事業

- 協力医療機関等において、東大病院で実施している「持参薬評価テンプレートを用いたスクリーニング」を導入し、処方適正化アプローチを実施。

＜平成30年度＞

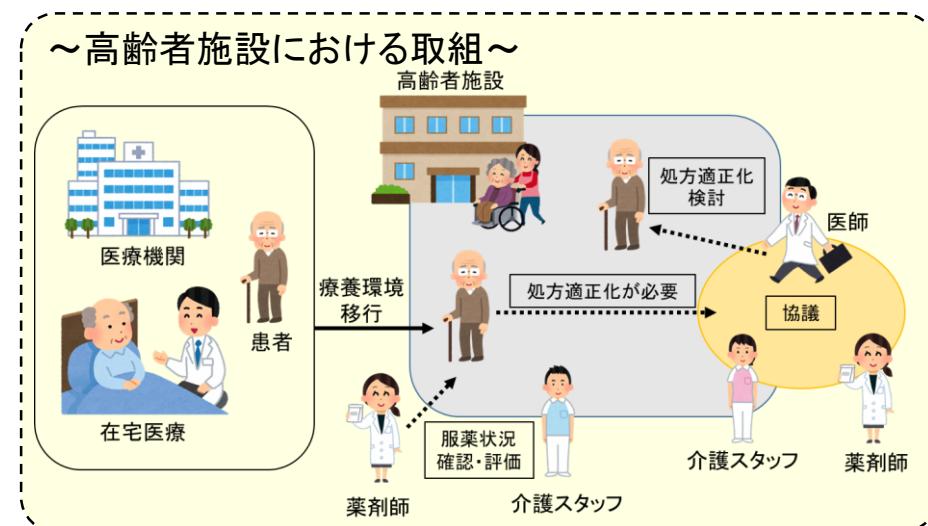
6つの協力医療機関(一般病床)に新規入院した65歳以上の患者を対象に実施。

＜令和元年度＞

入院期間が長い8つの協力医療機関(回復期リハビリテーション病棟又は地域包括ケア病棟)に新規入院した65歳以上の患者を対象に実施。

＜令和3年度＞

- ・ 上記医療機関で実施した持参薬評価テンプレートの事例から、優良事例の取りまとめを行い、医療機関向けの研修会などを通じて、周知啓発(10月31日開催、参加者計116名)。
- ・ 常勤医師が配置されていない特別養護老人ホーム等から3つのモデル施設を選定し、東大病院のテンプレートを用いた処方適正化の優良事例収集事業を実施。



患者啓発事業

- 医薬品の適正使用には患者とその家族の理解と協力、医療関係者からの丁寧な説明と情報提供が必要不可欠であるため、ポリファーマシーに関する啓発を実施。

<令和元年度>

- ・お薬手帳及びポリファーマシーに関する啓発事業
薬剤師が、来局した65歳以上の患者に対し、服薬指導時等にお薬手帳及びポリファーマシーに関する質問をし、それに基づいた啓発活動を実施。
- ・啓発用チラシ(右参照)、シール
一定数以上の医薬品を処方されている65歳以上の患者の来局時に、ポリファーマシーに関する説明を行うための啓発チラシ及びお薬手帳に貼付してもらうことで意識付けを行うシールを作成し、薬局へ配布。
※ チラシは県HPからダウンロード可能(→)



<平成30～令和3年度>

- ・お薬手帳の活用促進事業
服薬情報の一元化を図り、お薬手帳の正しい活用を促進するため、75歳以上の重複服薬者に対して、お薬手帳ホルダー等を送付し、その効果を解析(令和3年度は解析のみ)。

<令和2年度>

- ・市町村の保健事業への支援として啓発チラシを提供。

<令和2年度以降>

- ・「薬と健康の週間」を中心に県薬剤師会がSNS等を通じて県民へ啓発。



ポリファーマシー研修会事業

- 令和元年度から毎年、医師、薬剤師、看護師等の多職種を対象とした研修会を開催（県薬剤師会、県病院薬剤師会共催、県医師会後援）。

- ・令和6年度開催概要

日時 令和7年1月18日(土)15時～17時

場所 TKPガーデンシティPREMIUM天神スカイホール メインホールA(福岡市中央区天神1-4-1 西日本新聞会館16階)

- ・第一線で活躍されている医師、病院薬剤師、薬局薬剤師から取組事例等の講演を実施。
- ・参加費無料、各団体の協力の下、医師会、薬剤師会等の認定単位付与。

第1部

～医師の立場から～

15:00～15:45



「Multimorbidityの処方箋」

竹屋 泰 氏

大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻老年看護学 教授

第2部

～病院・薬局薬剤師の立場から～

16:00～16:30 「高齢者総合機能評価を考慮した ポリファーマシー対策」

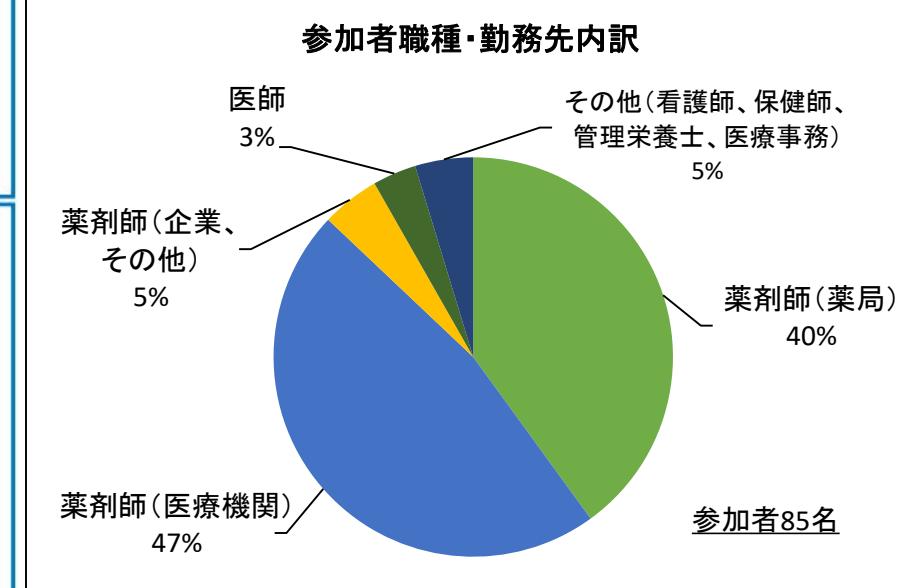
溝神 文博 氏

国立長寿医療研究センター 薬剤部
長寿医療研修部 高齢者薬学教育研修室 室長

16:30～17:00 「多職種連携で取り組む 在宅ポリファーマシー」

前地 香奈子 氏

株式会社アガベ 在宅担当



病院・薬局実態調査事業

○医療機関等におけるポリファーマシーの取組等に係る実態調査について

【令和4年度の取組】

病院におけるポリファーマシー対策に係る実態調査を実施。(県内全病院456施設を対象に、181施設から回答)

《結果概要》

- ・181施設のうち、実施施設は87施設(48.1%)。長期療養型病院(60.9%)、地域医療支援病院(59.4%)で割合高い。
 - ・未実施施設94施設のうち、「実施について検討を行う予定」である施設は51施設(54.3%)。
 - ・実施施設における取組は、医療従事者の意識向上、患者満足度の向上、医薬品購入金額の減少に寄与。
 - ・実施施設では、病棟薬剤業務実施加算、薬剤管理指導料を算定している施設が多い。
- また、ポリファーマシーに関して院外施設と連携している施設が多い(63.2%)。

【令和5年度の取組】

薬局におけるポリファーマシー対策に係る実態調査を実施。

(県薬剤師会加盟薬局約2400件を対象に、451施設から回答)

《結果概要》

- ・同効薬の多剤投与に係る減薬提案の頻度は約半数がよく又は時々行うと回答しており、そうした際の減薬の必要性は約9割の薬局がよく又は時々感じると回答
- ・ポリファーマシー対策に取り組むにあたって必要な点について多くの薬局が医療機関との連携やお薬手帳、電子処方箋の活用を挙げる他、「患者の理解」についても65%強の薬局が必要と回答
- ・ポリファーマシーに関して患者の理解が十分でない、診療報酬上の算定要件のハードルが高い※との趣旨の回答あり。
- ・ポリファーマシー対策の必要事項として、診療所や病院等の医療機関との連携の重要性が最多

(※令和6年度診療報酬改定による算定要件緩和前にアンケートを実施)

【対応策の検討】

- ・患者への啓発を求める声が多かった→患者の処方薬への関心を高めてもらうなど、継続的にポリファーマシー対策を実施していくことが重要
- ・医師、薬剤師等への啓発や連携強化→毎年度実施している医療関係者向けの研修会事業内容検討に活用。医療機関、薬局でのスクリーニングツールの活用法等を含めることを検討。